

【授業成果報告】文化人類学視点から博物館資料の活用・普及を考える

—會津八一記念博物館における課外授業より—

大坪 聖子（早稲田大学文学学術院総合人文科学研究センター）

Considering the Utilization and Dissemination of Museum Materials from the Perspective of Cultural Anthropology: From Extracurricular Classes at the Waseda Aizu Museum

Shoko OTSUBO

Adjunct Researcher, Research Institute for Letters, Arts and Sciences, WASEDA University

ABSTRACT

In the course I taught, "Frontiers of Cultural Anthropology 2: Frontiers of Cultural Heritage and Anthropology," an extracurricular class was held at the Waseda Aizu Museum and the 125th Anniversary Room on November 27, 2021, under the title "Considering the Utilization and Dissemination of Museum Materials from a Cultural Anthropological Perspective. The class was held on November 27, 2021. In the class, we presented issues for utilization and dissemination from a cultural anthropological perspective, based on the museum's exhibited materials.

This report is a summary of the results of the extracurricular class, including the interim report that preceded it.

はじめに

2020～2021年度に筆者が担当した文化構想学部の科目「文化人類学の最前線2－文化遺産と人類学の最前線」では、「文化人類学視点から博物館資料の活用・普及を考える」と題し、早稲田大学2号館の會津八一記念博物館¹⁾（写真1）およびその付属の施設である26号館の125記念室²⁾（写真2）において、昨年2021年11月27日に課外授業を実施した。授業では館内にある博物館展示資料を基に、文化人類学的な視点から活用・普及のための課題を提示した。

本稿は、先行して行なわれた中間レポートの評価と合わせ、課外授業での成果をまとめたものである。

また構成については、1として課外授業を行なった講義「文化人類学の最前線2」のカリキュラムをシラバスより紹介し、担当講義である題目「文化遺産と人類学の最前線」から講義目的と意義について述べてみる。次いで2では講義内で示した「文化資源の活用と普及」課題より、身近な郷土の文化資源を題材に文化人類学的な保存・保護に向けての活用と普及について提出されたレポートを考察する。本題の3では、課外授業の成果について総括する。なお、文中の写真につきましては、ティーチングアシスタントの後藤はるか氏（修士2年／2021年度）の撮影によるものである。

1. 講義：文化人類学の最前線2

1-1. 講義構成と概要

本講義の文化人類学の最前線2は、入門・導入の初級レベルで配当年次が1年以上のオープン科目であり、5人の担当教員によるオムニバス形式で行なわれている。しかし当年度においては、コロナ感染防止のためフルオンデマンド形態となった。ここでは文化人類学の多様なアプローチを学び、最新の研究課題について理解を深めることを目標としている。これまで文化人類学が培ってきた知識と研究方法を、積極的に「現代の文化現象」の分析と解



写真1 會津八一記念博物館



写真2 125 記念室

積へ応用しようとする挑戦的な試みに重点を置き、文化人類学という学問がいかなる現況に置かれているのかを示し、それぞれの細分野における最新の研究成果を解説する。その上で文化人類学が人間の営みを考え続ける上で在るべき方向性について、どのような問題提起を行っているのか、それに対して自らどのような答えを導き出そうとしているのかを明らかにする。授業では、文化人類学が現代世界をどのように見ているのか、どのような点に着目しなければならないのか、そしてそうした問題群を分析する際にどのようなアプローチが実現し得るのかを、様々なトピックから多角的に検討する³⁾。

1-2. 講義目的と意義

現在も伝統生活を営んでいる地域では、資本主義経済のグローバル化に伴い、都市化の進行や貨幣経済の定着化、さらには外界の接触により価値観の多様性が生まれ、伝統文化の崩壊が懸念される現象が起きている。ある文化遺産地域では、世界遺産に登録された2001年以降、観光開発が急激に進められ、遺跡整備による遺構の破壊、さらには遺跡に暮らす人の村が分断され、一部のコミュニティが消滅するといった問題が起きている。また観光客による人々の往来が頻繁になり、多様な価値観が流入し、伝統生活の変容や伝統行事の継承が危惧されている。しかしこの地域には先祖伝来の固有の文化や遺産を守る役割があり、さらには子孫に伝承していく使命がある。この過去と隔たりなく現在を生きる人々には、未来を読むための力を育むことが必要であり、祖先から受け継がれてきた誇りである文化遺産への意識の向上が重要であると考え。筆者が担当した第7-9回は、「文化遺産と人類学の最前線」と題し、文化遺産を取り巻く環境と諸問題を挙げ、文化遺産の活用と保護に向け、文化人類学的方法で解決策を講じていくことを目的とした。

以上のことから、世界遺産の枠組みとして文化遺産のユネスコ定義や概要をまとめ、その中で人類が引き起こした危機遺産の要因と今後の課題について述べる。文化遺産の保護活動と活用としてカンボジア・アンコール遺跡の事例を挙げ検証し、日本における文化遺産の活用の変遷を確認した。おわりにとしてラオス南部ワット・プー世界遺産地域の事例を挙げ、現在文化遺産の現場で起きている諸問題から、文化人類学的解決に向け、伝統文化の継承と共に文化遺産の活用と保護について再考した。

2. 郷土文化資料の活用と普及—中間レポートより

古来より海、河川、山地、森林といった天然資源を利用して営み続け、それが歴史として積み上がり固有の文化が形成され郷土となる。そしてその郷土に所産として有形・無形の文化的資源が誕生し、地域共有の文化財として後世に受け継がれていく。この地域共有の地域文化資源について把握する必要がある、まずは課外授業に先駆け、中間レポートとして「文化人類学視点から文化遺産の保護と活用を考える」と題し、身近な郷土の文化資源を選び出し、文化人類学的な保護に向けての活用と普及の企画案を考えてもらった。

2020年度・2021年度では、各地域の多種多様な題材を選定し、類型的なものから独創的なものまで様々な角度からの郷土文化資料の活用・普及が提案された（表1）。地域では北は北海道から南は沖縄県まで、また外国人留學生の出身地である中国や韓国他オーストラリアまで及ぶ。また題材については、①史跡・遺跡、②歴史的建造物・文化的景観、③伝統工芸、④伝統芸能、⑤年中行事・祭事、⑥民俗・民族文化、⑦博物館などの施設、⑧地域、などに大きく8つに分けられる。

①史跡・遺跡では、国指定史跡の「大森貝塚」や「深大寺城跡」や世界遺産「沖ノ鳥島」などが挙げられ、保存活動が順調に行なわれていることが示され、安定した活用普及が行なわれていることが窺われる。題材の中で最も多い②の歴史的建造物・文化的景観では、現存している建物を有効利用とした活用が多く、とくに中野区哲学堂のスタンプラリーや夕張廃墟巡りなどイベント要素があるものがみられた。また福島県文化財の復興や沖縄首里城の再建など、支援を呼びかける普及活動が中心であるが、一方で復興・再建後に向けての前向きな提案も出されている。③伝統工芸では、長野県「飯田水引」や岡山県「備中和紙」など、体験型のワークショップが提案された。④伝統芸能では、長野県「飯田人形劇」、茨城県龍ヶ崎市「撞舞」など観劇型スタイルで、かつそれに合わせて継承のための普及活動イベントを開催する案がみられた。⑤年中行事・祭事では、日本を代表する祭り「青森ねぶた祭」を挙げ、実際に行なわれている普及活動についてまとめている。⑥民俗・民族文化では、秩父地方の生産用具・漁撈用具から人々の暮らしを考えるワークショップなど具体的な企画が立案されている。

3. 文化人類学視点から博物館資料の活用・普及を考える

3-1. 授業概要

本講義では、伝統文化の継承と共に文化遺産の活用と保護を文化人類学的に考えてみるという観点から、「文化人類学視点から博物館資料の活用・普及を考える」と題し、會津八一記念博物館と125記念室において、その展示資料を使い企画案を作成してもらった。なお当日はコロナ感染状況を鑑み、参加対象を絞って少人数での実施となった。

はじめに、ギャラリートークとして当館学芸員の谷川遼氏に、メインロビーとなる明暗⁴⁾ホールにて博物館の歴史、會津八一とコレクション、展示紹介、活用普及活動についてのご講演を頂いた。

まずは課題作成にあたり、會津コレクション室にて以下の通り展示品を具体的に挙げて説明を行なった。

例題1) 産地別・年代順に並んでいる「瓦」に、文化人類学視点で展示を付け加えるとしたら？

例題2) 明器の「楽人俑⁵⁾」を使って文化人類学的なイベントを企画するなら？

参考回答例として、

例題1) 日本三大瓦を展示紹介、また現在瓦工房で使用されている道具や製造工程のパネル。

例題2) 「楽人俑」現在に伝わる中国古典音楽の曲を流す（音の展示）。音楽会を明暗ホールにて開催。

つまり、展示品を単なる昔のものとして捉えるのではなく、過去と現代を繋ぎ身近で体現することにより、その資料の本当の価値を知ることができるということを提示した。

今回の課外授業ではワークシートを使用し、①素材の選定、②テーマの設定、③対象年代、④企画案を作成、⑤期待される効果、といった項目で課題を行なった。

3-2. 企画案

企画案 1

- ①素材：縄文土器
- ②テーマ：「蘇る！縄文土器」縄文時代の人々の生活様式を土器を対象に疑似体験。
- ③対象年代：小・中学生，その家族も含む
- ④内容：VR（Virtual Reality 仮想現実）ゴーグルを使用し，土器づくりの場面，調理や食事の風景などを体験。また小学生を対象に粘土を使用した土器づくりのワークショップを開催。
- ⑤効果：縄文時代の生活様式をビジュアルで体感することで，縄文土器が「資料」から一つの「道具」として位置付けられ，縄文様式の生活が蘇ることで，現代の生活がとの共通点を探す楽しさ見出す。

企画案 2

- ①素材：掛軸
- ②テーマ：「自分の作品を掛軸にしてみよう！」お気に入りの作品を飾るための掛軸を，裂布から色や模様までをカスタマイズし，表装仕立を体験。
- ③対象年代：一般
- ④内容：掛軸の歴史，本紙，一文字，中廻，天地，風帯，掛尾，巻尾など各部位の名称をはじめとする表具の基礎知識を学び，掛軸の扱いや作法を実践する。最後に表装仕立のワークショップを開催し，日本固有の和紙の種類，裂衣の色・文様を学びながら，自分好みの掛軸を完成させる。
- ⑤効果：一般家庭から床の間がほとんど消滅した現在，掛軸の存在が失われていく中で，自分好みに掛軸を仕立てて，自分の作品やお気に入りの絵・写真などを飾る。現代の生活に掛軸を取り入れることにより，日本文化に触れ継承していく効果を狙う。

企画案 3

- ①素材：アイヌ民族資料
- ②テーマ：「アイヌに触れてみよう！（仮）」アイヌの展示から正しい歴史認識されるような文化的体験。
- ③対象年代：子供，シニア
- ④内容：＜学び＞アイヌ祭事・音楽（演奏会）・言葉（講座）
＜体験＞アイヌ刺繍・音楽（歌）・舞踊・疑似入れ墨
- ⑤効果：正しいアイヌ文化の知識の普及と継承への理解が重要と考え，学習や体験を通し，歴史・文化的背景の中で特有の多様性を知り，一過性でない持続可能な問題意識を持ってもらうことを目的とする。

おわりに

当日は穏やかな小春日和な気候に恵まれ，課外授業の成果としても充実とした一日となった。

企画1では，VRという最先端の技術を使用し，視覚から直接に縄文時代の生活を体験できる新しい目論見であることがいえる。企画2では書画ではなく掛軸の表装自体に着目し，オリジナルの掛軸を作成する体験から，日本文化を継承する役割を提示した。古来掛軸は客人をもてなし，家のポリシーや家内安全などの祈りが込められたものでしたが，掛軸そのものを主役にして好きなものを飾るアイテムとして生まれ変わらせる狙いがあり，床の間文化を継承する役割を持つことを表している。企画3では，アイヌ民族史料を題材にし，豊富で特異なアイヌ文化に触れ，その中で正しいアイヌ文化を知り，持続的な問題意識を広く普及させることを提示している。

以上短時間であったが，提出されたワークシートには，各自に問題意識の高さが窺える完成度の高いレポートとなった。コロナ禍の厳しい実施ではあったが，本講義の中で一定の成果が見られたのではないかと考えている。

謝辞

本授業は、會津八一記念博物館のご協力のもと、館長の肥田路美先生、主任研究員の下野玲子先生、学芸員の谷川遼助手にご教示を賜りました。また課外授業の実施にあたり、本講義コーディネーターの酒井貴広先生にはご尽力頂きました。

授業当日は、谷川助手にギャラリートークのご講演を頂き、また館内の受付・監視員のキャストの皆様には準備や誘導・案内など補佐をして頂きました。このほかティーチングアシスタントの後藤はるか氏、受講生の小林幹氏、江口佳奈氏、吉本幸氏にもご協力頂きました。ここに記し合わせて心から謝意申し上げます。

註

- 1) 會津八一記念博物館は、早稲田大学2号館に位置する。本学の教授で東洋美術研究者、また歌人や書家でもあった故會津八一博士を記念し、旧図書館であった2号館に1998年設置された。
- 2) 125記念室は、別称大隈記念タワーといわれる早稲田大学26号館10階に位置する。本室では會津八一記念博物館収蔵である考古学・民族資料を一堂に集め、2019年9月より考古・民族専門の常設展示室として設置されている。
- 3) 早稲田大学シラバス詳細照会より
- 4) 明暗 --- 横山大観（1868-1958）下村観山（1873-1930）の合作、制昨年1927年（昭和2年）、技法：紙墨・金銀泥、法量：445.0 cm、図書館として建設された際、当時総長の高田早苗が大観・観山に依頼した。読書を通し知識を得る様子を日の出で表現。
- 5) 楽人俑 --- 「俑」とは中国古代墳墓に副葬された人形型の明器。「楽人」は音楽を奏でる役割の人。この俑を含む明器類は會津コレクションを代表する資料となっている。

文献目録

青木豊

2012 『人文系 博物館資料保存論』東京：雄山閣

一瀬和夫

2020 『博物館での展示と遊び』東京：CIA

小川義和・高田浩二・松岡敬二

2010 「博物館教育論～展示の活用とその効果」『展示論—博物館の展示をつくる—』日本展示学会 東京：雄山閣, 157-171.

松田陽

2020 『文化財の活用とは何か』國學院大學研究開発推進機構学術資料センター 東京：六一書房

表1 文化人類学視点から文化遺産の保護と活用を考える

	所在地	題材	受講年度
1	中国 上海市	古典園林「豫園(よんえん)」	2020年度
2	韓国 利川市	陶磁器、利川(いちよん)陶芸村	2020年度
3	神奈川県 藤沢市	江ノ島、遊行寺	2020年度
4	東京都 調布市	国指定史跡深大寺城跡	2020年度
5	京都府 京都市	京都市文化財、都文化財マップ	2020年度
6	長野県 飯田市	伝統工芸「飯田水引」	2020年度
7	青森県 青森市	青森ねぶた祭	2020年度
8	千葉県 佐倉市	国立歴史民俗博物館	2020年度
9	茨城県 石岡市	常陸國總社宮大祭行事「石岡のおまつり」	2020年度
10	北海道	アイヌ文化	2020年度
11	長野県 飯田市	伝統芸能 人形芝居	2020年度
12	埼玉県 秩父郡長瀬町	山村生産用具、漁撈具	2020年度
13	東京都 品川区・大田区	大森貝塚	2020年度
14	福島県	震災復興・文化財等	2020年度
15	—	無形文化財—能楽	2020年度
16	静岡県・山梨県	世界遺産—富士山	2020年度
17	沖縄県 那覇市	首里城及びその周辺	2020年度
18	—	持続可能な保護と普及論	2020年度
19	オーストラリア ノーザンテリトリー—準州	複合遺産「ウルル」	2020年度
20	茨城県 龍ヶ崎市	伝統芸能「撞舞(つくまい)」	2020年度
21	長崎県 長崎市	長崎の文化的景観	2020年度
1	広島県 中須	子ども会	2021年度
2	大阪府 大阪市西成区	大正時代の妓楼建築、老舗料亭「鯛よし百番」	2021年度
3	中国 重慶市	伝統歌曲「川江号子」	2021年度
4	神奈川県 鎌倉市	鶴岡八幡宮、大銀杏	2021年度
5	千葉県 我孫子市	文豪の別荘	2021年度
6	岡山県 倉敷市	有形文化財—備中和紙	2021年度
7	東京都 中野区	建造物「哲学堂」	2021年度
8	東京都 八王子市	養蚕文化「絹の道」	2021年度
9	群馬県 前橋市	重要文化財「臨江閣」	2021年度
10	福岡県 宗像市	世界遺産—沖ノ島とその関連遺産群	2021年度
11	福島県 南会津地域	大内宿、宿場町並み	2021年度
12	東京都 世田谷区	五島美術館	2021年度
13	北海道 夕張市	夕張炭鉱遺産と廃墟街	2021年度
14	岐阜県 飛騨地方	白川郷 合掌造り	2021年度
15	東京都	幼稚園と神社	2021年度
16	東京都 練馬区	石神井城跡、町祭り	2021年度